

語用論と臨界期 (3) : 年齢が語用論的能力習得に及ぼす影響

川手・ミヤジェイエフスカ 恩
テンプル大学ジャパンキャンパス

1. はじめに

本稿では、2008 年度のベオグラードでの学会発表(川手・ミヤジェイエフスカ 2009a)に引き続き、年齢が語用論的能力習得に及ぼす影響を考えてみる。これは、2007 年度にハンガリーで発表した(川手・ミヤジェイエフスカ 2008)最初の予備調査の結果をふまえて行った2回目の予備調査を更に進展させた研究の一部である。具体的には、『友人に母親を語る時』という状況において、年齢が如何に語用論的能力に影響を及ぼしているのかを考察する。

語用論とは、実社会における我々人間同士の言葉の使い方を研究する学問である (Crystal, 1997; Kawate-Mierzejewska, 2002; 川手・ミヤジェイエフスカ 2008; 2009a)。

以下、本稿の研究調査の要となる『脳機能と年齢』『第一言語習得と年齢』『語用論的能力の発達と年齢』『ダイアレクトの習得と年齢』『西日本と東日本の語用論的方略の相違』を簡単に見ておく。なお、本研究で重要となる発話行為である『褒め言葉と謙遜』に関しては川手・ミヤジェイエフスカ(2009a)の 70~71 ページを参照されたい。

2. 先行研究

2-1 脳機能と年齢

脳科学の先行研究によれば、普遍的な現象として我々人間の脳機能は年齢と共に低下してくるといふ (Brehmer, Li, Muller, von Oertzen, & Lindenberger, 2007; Raz et al., 2005; Grady, Springer, Hongwanishkul, McIntosh, & Winocur, 2006; Shing, Werkle-Bergner, Li, & Lindenberger, 2008)。具体的には、物事を迅速に処理できなくなったり (Schaie, 1989) 決断力がなくなったりする (Cerella, 1990; Salthouse, 1991)。それらの要因は、感覚知覚機能の低下。In addition, it could be the decline in sensory functioning (Baltes & Lindenberger, 1997; Lindenberger, Scherer, & Baltes, 2001), 前頭葉前部の容積 (Raz et al., 2005, 2008)、或いは記憶力の低下 (Chua, Schacter & Sperling, 2009; Dodson, Bawa, & Krueger, 2007; Dodson, Bawa, & Slotnick, 2007) などによって説明できるかも知れない。

2-2 第一言語習得と年齢

脳の機能と年齢を考えた時、重要になってくるのが『臨界期』の存在であろう。

Johnson & Newport (1989) によれば、『臨界期』は“from early infancy until puberty (p. 60[乳児期早期から思春期まで]) という。つまり、我々が人生の初期に迎える外部からの刺激に対する感受性が最も高まる短い期間ということになる (Birdsong, 2005; Hytlenstam & Abrahamsson, 2003; Montrul, 2008)。このように、『臨界期』には、始まりと終わりがあり (Colombo, 1982)、この時期は、様々なことが容易に習得できるわけだ。そして、2007 年のハンガリー (川手・ミヤジェイエフスカ, 2008) やその翌年のベークラード (川手・ミヤジェイエフスカ, 2009a) の会議でも言及したように、『臨界期』は言語習得にも影響を及ぼすようだ。

『臨界期仮説』 (*The critical period hypothesis*) によれば、生後 10 年間は脳が可塑性 (*plasticity*) をもっているので努力なくして言語習得が可能である (Penfield & Roberts, 1959; Lenneberg, 1967) という。思春期が始まると左脳における言語習得領域の側性化 (*lateralization*) が強まり、脳の可塑性 (*plasticity*) がなくなり、努力なくしての言語習得は困難になると考えられる (Penfield & Roberts, 1959)。失語症の子供の言語機能の回復は、同じ障害を持つ大人より早い (Lenneberg, 1967; Basser, 1962) という事実からも、臨界期仮説を支持できる。要するに、若い子供たちは言語習得が容易にできる (Chomsky, 1959; Pinker, 1994) ことになる。

また、思春期を過ぎると言語習得が困難な理由として、認知過程の発達もある (Newport, 1990) ようだ。つまり、学習内容や教師が嫌いという意識が学習を妨げ、ひいては言語習得が思うようにいなくなったりする。

2-3 語用論的能力の発達と年齢

先行研究によれば、母語における語用論的能力は、小学生という人生の初期に第一言語発達の過程において発達するようだ。つまり、臨界期と呼ばれる言語習得に努力を要する時期が来る前ということになる。

子供は 8 歳くらいから語用論的能力が備わっている (Ervin-Tripp & Gordon, 1986; Gordon, Budwig, Strage & Carrell, 1980)。Liebling (1988) は、小学校 3 から 5 年生までにはかなり高度な語用論的能力が身につくという。また、バイリンガルの小学生には、社会言語的能力も身につけている (Walters, 1981) という研究報告もある。以上より、母語における語用論的能力は、小学生になってからの第一言語発達の過程において発達するようだ。つまり、臨界期仮説は語用論習得においても支持されるようだ。

2-4 ダイアレクトの習得と年齢

先行研究によれば、ダイアレクトの習得においても臨界期仮説を支持できそうだ。特に発音に関しては難しいようで、思春期を過ぎると母語話者としての発音を習得することは困難であるという (Labov, 1966; Krashen & Seliger, 1975; Scovel, 1998)。これは、日本語習得においても例外ではなく、思春期を過ぎて異なるダイアレクトを習うと、最初に習得したダイアレクトのピッチ・アクセントを使う傾

向にある (Kaiser, 1995; Kindaichi, 1977; Kawate-Mierzejewska, 2009b)。

2-5 西日本と東日本の語用論的方略の相違

先行研究によれば、関西人と関東人は、関西弁とか東京弁という言語そのものに加えて、「話し方の態度、方略、表現の単刀直入さ、トピックや非言語的要素に至るまで違うと感じている人が多いようだ(川手・ミヤジェイエフスカ 2008, 97 ページ)」。更に、『身内を語る時』の方略においては、関西と関東では類似点より相違点のほうが多い (川手・ミヤジェイエフスカ 2009a)。例えば、『褒める』という発話行為においても褒める内容が異なる。西日本では『能力』を褒めることが多いが、関東では『外見』や『人柄』を褒める傾向にある。また、西日本では『人物紹介』や『感謝』や『希望発言による謙譲表現』がよく使われるが、関東では殆ど使われない。

更に、年齢と語用論習得の関係においては、語用論的能力も第一言語の習得と共に発達するのかもしれない。先行研究によると「小学校を卒業してからの関東へ移住した人たちが、未だに西日本でよく使われる方略を使っていることを考えると、語用論能力も思春期を迎えるまでに第一言語習得・発達とともに身につけ、思春期を過ぎてからの無意識的な努力なくしての習得は困難なのかも知れない (川手・ミヤジェイエフスカ 2009a, 77 ページ)」という。

3. 本研究の目的と枠組み

本研究調査は、現在までの研究 (川手・ミヤジェイエフスカ 2008; 2009a) を踏まえ、語用論的能力の習得が言語習得のどの段階で行われるかということの解明を目的とする。また、年齢が語用論習得に与える影響においては、言語習得に努力が必要になる思春期を過ぎてからでも語用論的能力の習得はできるのか否かということも考えてみたい。

具体的には、まず、現在関東 (東京、神奈川、大宮までの東京寄り埼玉県、市川までの東京寄り千葉県) に住む 3 つの異なるグループの『母親を語る』という状況における発話行為の共通点や相違点を考察する。それらのグループとは、関東で生まれ育ったグループ、関西で生まれたが、小学校に入る前に東京もしくは東京周辺に引っ越したグループ、そして子供時代を関西で過ごし臨界期が終了したと考えられる 12~13 歳を過ぎてから関東に引っ越したグループである。

4. 研究調査事項

関東で生まれ育ったグループと、小学校に入学する前に関東に引っ越してきた人たち、そして思春期を過ぎてから関東に引っ越してきた人たちの『母親を語る』際の発話行為の類似点や相違点は何か。

5. 研究調査方法

5.1 参加者

19歳から30歳までの日本語を母語とする関東(東京、神奈川、大宮までの東京寄り埼玉県、市川までの東京寄り千葉県)に住む68人が本研究に協力してくれた。

日本語を母語とする68人は、3つの異なるグループより成り、関東で生まれ育った44人、関西(大阪、神戸、滋賀、和歌山)で生まれ、小学校に上がる前(本研究では、便宜上『思春期を迎える前』という表現と同じ意味で使われている)に関東に引っ越してきた8人、それから、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきた16人が本研究に参加してくれた。

5.2 研究調査マテリアルとデータ収集過程

データ収集には、3つの異なる発話行為に関する状況を想定した談話完成テストが使われた。本研究で使われた談話完成テストは、予備的研究調査(川手・ミヤジエイエフスカ 2008; 2009a)をもとに調整され『友人を食事に招待する時に母親を語る』『決断と交渉』『謝罪』という3つの発話行為を取り上げたものである。本稿は、そのうちの一つである、『友人を食事に招待する時に母親を語る』際の発話行為に焦点を当てる(参考資料1)。この『友人を食事に招待するとき』の状況はSakamoto & Sakamoto (2004)の逸話を基に作成されたものである。予備的研究調査で使われたシナリオは、『友人を食事に招待する時に、自分自身の妻や夫のことをどう話すか』という内容のものであった。しかし、本研究では、参加者が大学生や大学院生で大半が独身であるということを考慮して、母親にした方が現実の状況により近いという結論に達し、予備的研究調査で使われた談話完成テストに修正を加えて『友人を食事に招待する時に、自分自身の母親のことをどう話すか』という内容で調査をした。

談話完成テストは、参加者自身に関する情報収集のためのアンケートと、研究調査参加同意書と共に、授業の後の休み時間などに配布され20分程でやってもらった。参加者自身に関する情報は予備的研究調査で使われたものと同様の日本語で書いてあるアンケート(参考資料2)で収集した。また、同意書も日本語で書かれたもの(参考資料3)を使い、参加者の承諾をもらった。

最後に、アンケートの手順としては、まず、情報収集のためのアンケートを配り、それを書いてもらってから談話研究テストをやってもらった。そして、最後に研究調査参加同意書を渡し回収した。

5.3 収集データ分析方法

収集データを分析する際に、まず全ての発話をそれぞれのグループに分類しその結果を分析した。以下、分類の種類とコーディングについて述べる。

収集されたデータは、表現(以下、発話と呼ぶ)一つを『いち』と数え、接続詞で繋がっているような表現は二つの発話と考えられた。例えば、「料理が得意な

表1 分類の種類とコーディング(日本語)

	発話
その場にはいない母親をほめる	
外見	とてもかわいいよ。
人柄	とても優しいよ：とても陽気な人だから。。。。
能力*	料理がうまいので。。。：料理が上手だから。。。 おいしいですよ。
その場にはいない母親に代わって話す(母親のために)	
社交辞令	君に会うのを楽しみにしてるよ：あなたに会うのを楽しみにしています。
代弁(聞き手に対する気持ち)	君のことをとても気に入ってます。
代弁(料理に関すること)	美味しいご飯を作ると張り切っていました。
人物紹介	彼女は昔、歌手だったんだ。
聞き手に対しての発言	
希望・前向きな意見	素晴らしい夕食をとることができるでしょう：。。。 食事を楽しんでほしい。
依頼	時間があったら何か買ってきてよ。
提案	。。。 今回の選挙についてなんていうのか準備しておいた方がいいよ。
感謝	ありがとう。
代弁(聞き手のために)	該当なし
好意(聞き手の好みを聞く)	なにか苦手なものはありますか。
家族としての発言	
社交辞令	金曜日にお待ちしてますね。
話し手の気持ちを述べる	
直接的	。。。 君に会わせるのが楽しみです。
間接的	僕はいつも母に君のいいところを語り聞かせているからね。
その場にいない母親のことを謙遜する	
前向きな謙遜	御馳走をふるまってくれるらしいよ。
否定的な謙遜	。。。 はっきりいって料理には期待しない方がいいよ。

* 『能力』には、「母親は料理が上手だ」という料理の上手さを褒めるものに加えて、「母親の作ったお料理はおいしい」というお料理そのものを褒めるものも入れてある。

ので、あなたに食事を楽しんでほしい」というような表現は「料理が得意」と「食事を楽しんでほしい」というように二つの発話からなると考えられた。また、各人がそれぞれのターンで、一言から二言（「君に会うのを楽しみにしてるよ。きっと素敵な食事会になるよ」）、三言（「とても料理がうまいんだ。思う存分食事を楽しんでください。金曜日に会うのを楽しみにしてるよ」）と話すこともあり全体で121の発話となった。内訳は、関東で生まれ育った44人からは71の発話、小学校に上がる前に関東に引っ越して8人からは14の発話で、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきた16人からは36の発話を得た。

分析に際してまず、全ての発話は、話し手と聞き手、そして内容という二つの観点から、『その場にはいない母親を褒める』『その場にはいない母親に代わって話す（母親のために）』『聞き手に対しての発言』『家族としての発言』『話し手の気持ちを述べる』『その場にはいない母親のことを謙遜する』という6つの大きなカテゴリーに分けられた（表1参照）。

本研究は談話完テストに返答を書き込んでもらうという方法をとったので、書き言葉を収集した形となった。したがって、語彙や語尾などの相違には、焦点をあてず、発話行為の内容や方略の分析を試みた。以下、それぞれのカテゴリーを見ておく。

まず『その場にはいない母親を褒める』というカテゴリーは、母親の何を褒めるかという内容を考慮し、更に『外見』『人柄』『能力』という3つのサブ・カテゴリーに分けられた。予備的研究調査では『組み合わせ』というカテゴリーもあったがこれは本研究調査には見られなかったので削除された。表1にあるように「かわいい」というのは『外見』、「やさしい」とか「陽気な人」は『人柄』、そして「料理が上手」というのは『能力』と考えた。更に、「母親の作った料理はおいしい」というようなお料理そのものを褒める発話も料理が上手なのでその結果、作ったものがおいしいという具合に解釈をして『能力』というサブ・カテゴリーに入れ、母親を褒めていると考えた。次に『その場にはいない母親に代わって話す（母親のために）』という項目をみておく。これは、話し手が、母親が言うだろうことを想定して、代弁するもので、英語を使えば“she (3人称単数)”で始まる発話である。発話の内容を基に、『社交辞令』『代弁（聞き手に対する気持ち）』『代弁（お料理に関すること）』『人物紹介』という4つのサブ・カテゴリーに分けられた。そして、「あなたに会うのを楽しみにしています」にあるような「楽しみにしている」という定形発話は『社交辞令』、「君のことをとても気に入っています」というような母親の気持ちを代弁した発話は『代弁（聞き手に対する気持ち）』と考え、「美味しいご飯を作ると張り切っていました」というようなお料理に関することは『代弁（お料理に関すること）』というサブ・カテゴリーに入れた。そして、「昔は彼女、歌手だったんだ」というような母親の紹介は『人物紹介』とした。次の『聞き手に対しての発言』（英語を使えば“I”で始まる発話や“can/could you...?”）にもサブ・カテゴリーがあり、『希望・前向きな意見』『依頼』『提案』『感謝』『代弁（聞

き手のために)』『好意 (聞き手の好みを聞く)』に分かれた。まず、『希望・前向きな意見』は、「素晴らしい食事をとることができるでしょう」とか「...食事を楽しんでほしい」のような発話で、『依頼』は字のごとくリクエストで「時間があつたら何か買ってきてよ」というで、『提案』は「...今回の選挙についてなんていうのか準備しておいた方がいいよ」というような発言、『感謝』とは字のごとく「ありがとう」というものであった。更に『代弁 (聞き手のために)』と『好意 (聞き手の好みを聞く)』に関してだが、前者は日本語のデータには該当がなかったが、英語のデータとの比較のため便宜上入れてある。そして後者は「なにか苦手なものがありますか」のような発話があった。さて次の『家族としての発言』であるが、これは、話し手の発話は同時に母親のものでもあるというもので、英語を使えば“we”にあたるものである。「金曜日にお待ちしてますね」というような『社交辞令』がこのカテゴリーに入った。予備的研究調査では『家族としての発言』というカテゴリーの下に『意思の伝達』というサブ・カテゴリーがあったが、これは該当がなかったため削除された。これらの他のカテゴリーとして『話し手の気持ちを述べる』というもの作成し『直接的』(e.g., 君に会わせるのが楽しみです)とか『間接的』(e.g., 僕はいつも母に君のいいところを語り聞かせているからね)というサブ・カテゴリーを作った。また、『褒める』『中立』という立場での発話に加えて、『謙遜』と考えられる発話も見られた(表1)。そこで、『その場にはいない母親のことを謙遜する』というカテゴリーを作成し、使われた表現より『前向きな謙遜』(e.g., 御馳走をふるまってくれるらしいよ)と『否定的な謙遜』(e.g., ...はつきりいって料理には期待しない方がいいよ)に分けた。

以上のように121の発話を2人のコーダーで分類した後(コーダー間の信頼性は90%以上で、意見が合わなかった発話に関しては最終的に話し合いでカテゴリーを決めた)、それぞれのカテゴリーの発話回数を数えて、観測度数(observed frequency)を基に関東で生まれ育ったグループ、関西で生まれ小学校に上がる前に関東に引っ越してきたグループ、そして同じく関西で生まれ思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループによる発話の類似点や相違点を吟味した。更に、その結果を踏まえて、年齢が語用論的能力の習得に与える影響を分析した。

本研究でも、観測度数(observed frequency)を基にはしているが、予備研究調査と同様に、統計処理の結果を想定した上で質的分析が試みられた。本研究は、語用論的能力の習得と臨界期の有無に関しての理論構築における最初の段階で、間接的データより傾向を見出そうとするもので、それぞれのカテゴリーにおける発話数が理論構築のための統計処理をするのには少なすぎたため、統計処理にまでは至らなかった。また、各人が複数の発話をしている場合もあり、一人の参加者の発話が一つのカテゴリーだけでなく他のカテゴリーにも及んでいるのも統計処理をしなかった理由である。

最後に、予備的研究調査にあった『のろけ』や『やきもち』というサブ・カテゴリーに該当する発話はなかったので、それらは削除された。

6. 結果と考察

表 2 母親を語る時に使われる方略

	関東	小学校入学前	思春期過ぎ	合計
その場にはいない母親をほめる	6	2	12	20
外見	0	0	1	1
人柄	3	1	0	4
能力	3	1	11	15
その場にはいない母親に代わって話す(母親のために)	43	7	11	61
社交辞令	34	6	6	46
代弁(聞き手に対する気持ち)	3	0	4	7
代弁(料理に関すること)	4	0	0	4
人物紹介	2	1	1	4
聞き手に対しての発言	18	4	9	31
希望・前向きな意見	8	3	8	19
依頼	3	1	0	4
提案	2	0	0	2
感謝	1	0	1	2
代弁(聞き手のために)	0	0	0	0
好意(聞き手の好みを聞く)	4	0	0	4
家族としての発言	2	1	0	3
社交辞令	2	1	0	3
話し手の気持ちを述べる	0	0	4	4
直接的	0	0	3	3
間接的	0	0	1	1
その場にはいない母親のことを謙遜する	2	0	0	2
前向きな謙遜	1	0	0	1
否定的な謙遜	1	0	0	1
合計	71	14	36	121

本項では、まず、関東で生まれ育ったグループと、小学校に入学する前に関東に引っ越してきた人たち、そして思春期を過ぎてから関東に引っ越してきた人たちの『母親を語る』際の発話行為の類似点から見ていく。

表 2 からわかるが、どのグループも多かれ少なかれ『聞き手に対しての発言』では希望や前向きな意見を述べることがわかった（関東 8/18、小学校入学前 3/4、思春期過ぎ 8/9）。この結果は、予備的研究調査の結果と同じである。しかし、予備的研究調査で東でも西でも使われているとわかった『家族としての発言』の社交辞令は本調査では、わずかに関東（2/2）と小学校入学前（1/1）のグループに見られたただけであった。件数も少ないのでここでは、あまり問題にしないことにする。

次に相違点だが、まず統計的にも異なると思われる観測度数に焦点を当てておく。まず『褒める』という項目を見ると、関東（6/20）や小学校入学前（2/20）のグループより思春過ぎのグループ（12/20）が母親を褒める傾向にある。特に、関東（3/6）や小学校入学前（1/2）のグループにはあまり見られないが、思春過ぎのグループは『能力』（11/12）を褒める傾向にあるようだ（表 2）。予備的研究調査から、西日本では、『能力』を褒めるという結果が出ているので、これより、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループは、やはり関西で見られる方略を使っているのかもしれない。次に『その場にはいない母親に代わって話す』をみると表 2 よりわかるように関東グループ（43/61）が圧倒的に多く、思春過ぎ（11/61）、そして小学校入学前（7/11）と続く。全体の発話数から考えても関東（43/71）は、半数以上の発話がこのカテゴリーに入る。また、小学校に入学前（7/14）も半数の発話がこのカテゴリーに入るのに対し、思春過ぎ（11/36）は 30%程の発話にとどまっている。また、サブ・カテゴリーをみると、この『母親に代わって話す』というカテゴリーの関東グループの 80%の発話（34/43）、そして小学校入学前の殆どの発話（6/7）は『社交辞令』となっているのに対し、思春過ぎのグループの場合は、約半数の発話（6/11）にとどまっていた。予備的研究調査からも、関東では、身内に代わって社交辞令的な発話をするという結果が出ている。これより、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループは、関東の、身内に代わって話す社交辞令的な発話には慣れていないのではないかとということが伺える。

これらの他に、件数は少ないが『聞き手に対しての発言』というカテゴリーにある『依頼』と『好意（聞き手の好みを聞く）』は思春過ぎグループには見られなかった。前者は関東（3/4）と小学校入学前（1/4）に見られ、後者は関東グループ（4/4）だけに見られた発話だった。また、『話し手の気持ちを述べる』というカテゴリーでは、『直接的』（3/3）『間接的』（1/1）にかかわらず、思春過ぎのグループにだけ見られる発話であった。

以上より、関東と小学校入学前は共通点が多いが、思春過ぎのグループの発話とは異なる点が観察される。更に、思春過ぎの発話は予備的研究調査に照ら

し合わせてみると西日本の発話との類似点が多いようだ。したがって、身内を語るような状況における語用論的能力は、母語習得の過程で発達し、小さい時に養われたそのような能力は大人になってもしっかりと身に付いているのかもしれない。そういう意味で、思春期を超えてから異なるダイアレクトの語用論能力を発達させ習得するのは難しいのかも知れない。

7. おわりに

以上、関西で生まれ思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループによる発話と関東で生まれ関東育ちのグループによる発話では相違点が多いことがわかった。具体的には、前者は『母親を褒める』という発話が多かったのに対し、後者では、あまり見られなかった。一方、後者は『母親に代わって社交辞令をいう』という発話が多くみられた。この発話からも、関西で生まれて小学校に入学する前に関東に引っ越してきたグループによる発話は関東の発話と共通点が多いことが分かった。つまり、語用論的能力は幼児期の母語習得と同時に発達するようだ。

今後の課題として、参加者の数、発話行為の種類、言語の種類などを増やして研究を進めていくことが大切であろう。また、調査方法の見直しもはかりより現実に近い方法（会話分析など）で、臨界期と語用論的能力に関する間接的データを収集していくとともに脳と語用論的能力習得における臨界期の関係の直接的なデータの収集にも取り組めたら本望である。

参考文献

- 川手ミヤジェイエフスカ 恩 (2008) 『語用論と臨界期(1)-研究方法の模索-』 「日本語教育連絡会議論文集 (Papers presented at the 20th International Conference on Japanese Language Teaching [ICJLT])」 Vol. 20, 83-100 ページ
- 川手ミヤジェイエフスカ 恩 (2009a) 『語用論と臨界期(2)-身内を語る時:異なるダイアレクトにおいて-』 「日本語教育連絡会議論文集 (Papers presented at the 21th ICJLT)」 Vol. 21, 68-81 ページ
- Basser, L (1962). Hemiplegia of early onset and the faculty of speech with special reference to the effects of hemispherectomy. *Brain* 85, 427-460.
- Baltes, P. B. & Lindenberger, U. (1997). Emergence of a powerful connection between sensory and cognitive functions across the adult life span: A new window to study of cognitive aging? *Psychology and Aging* 12(1). 12-21.
- Birdsong, D. (2005). Interpreting age effects in second language acquisition. In J. Kroll, & A. de Groot (Eds.), *Handbook of bilingualism, psycholinguistic perspectives*, (pp. 109-127). Oxford: Oxford University Press.
- Brehmer, Y, Li, S-C., Muller, V., von Oertzen, T. & Lindenberger, U. (2007). Memory plasticity across the life span: Uncovering children's latent potential. *Developmental*

- Psychology* 43(2). 465-478.
- Cerella, J.(1990). Aging and information-processing rate. In J.E. Birren & K.W. Schaie (Eds.), *Handbook of the psychology of aging* (3rd ed., pp. 201-221). San Diego: Academic Press.
- Chomsky, N. (1959). Review of skinner 1957. *Language* 35, 26-58.
- Chua, E. F., Schacter, D.L., & Sperling, R. A. (2009). Neural basis for recognition confidence in younger and older adults. *Psychology and Aging* 24(1). 139-153.
- Colombo, J. (1982). The critical period concept. Research methodology, and theoretical concerns. *Psychological Bulletin* 91, 260-275.
- Crystal, D. (Ed.). (1997). *The Cambridge encyclopedia of language* (2nd ed.). New York: Cambridge University Press.
- Dodson, C.S., Bawa, S. & Krueger, L.E (2007). Aging metamemory, and high-confidence errors: A misrecollection account. *Psychology and Aging* 22(1). 122-133.
- Dodson, C. S., Bawa, S. & Slotnick, S.D. (2007). Aging, source memory, and misrecollections. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 33(1). 169-181.
- Ervin-Tripp, S. and Gordon. D. (1986). The development of request. In R. L. Schiefelbusch (Ed.), *Language competence: Assessment and intervention* (pp. 61-95). London: Taylor & Francis.
- Gordon, D., Budwig, N., Strage, A., and Carrell, P. (1980). *Children's requests to unfamiliar adults: Form, social function, age variation*. Fifth annual Boston university conference on language development, Bston. (ERIC document reproduction service No. ED205-053).
- Grady, C., Springer, M.V., Hongwanishkul, D., McIntosh, A.R., & Winocur, G. (2006). Age-related changes in brain activity across the adult life-span. *Journal of Cognitive Neuroscience* 18(2). 227-241.
- Hyltenstam, K., & Abrahamsson, N. (2003). Maturational constraints in SLA. In C. Doughty, & M. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition*, (pp. 539-588). Oxford: Blackwell.
- Johnson, J. S. & Newport, E. L. (1989). Critical period effects in second language learning: The influence of maturational state on the acquisition of English as a second language. *Cognitive Psychology* 21(1). 60-99.
- Kaiser, S. (1995). *Japanese Language II: Book 3*. Tokyo: Printx.
- Kawate-Mierzejewska, M. (2002). Refusal sequences in conversational discourse (UMI Number 3057084). *UMI Dissertation Services*.
- Kawate-Mierzejewska, M. (2009b). Age effects on dialect acquisition of Japanese pitch accent. *Journal of the Department of Asian and African Studies* 13 (1),

- 179-198. Ljubljana (Slovenia): University of Ljubljana: Faculty of Arts.
- Kindaichi, H. (1977). Accent no bunpu to henshen. [Different pitch accent patterns in different dialects and their historical changes]. In S. Oono & T. Shibata (Eds.), *Nihongo: Hoogen [Dialects in Japan]* pp. 127-180. Tokyo: Iwanami-shoten.
- Krashen, S. & Seliger, H. (1975). Maturation constraints on second dialect acquisition. *Language Sciences* 38, 28-29.
- Labov, W. (1966). *The social stratification of English in New York city*. Washington DC: Center for Applied Linguistics.
- Lenneberg, E. (1967). *Biological foundations of language*. New York: Wiley & Sons.
- Liebling, C. (1988). Means to an end: Children's knowledge of directives during the elementary school years. *Discourse Process* 11, 77-99.
- Lindenberger, U., Scherer, H., & Baltes, P.B. (2001). The strong connection between sensory and cognitive performance in old age: Not due to sensory acuity reductions operating during cognitive assessment. *Psychology and Aging*, 16, 196-205.
- Montrul, S.A. (2008). *Incomplete acquisition in bilingualism: Re-examining the age factor*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Newport, E. L. (1990). Maturation constraints on language learning. *Cognitive Science*, 14, 11-28.
- Penfield, W., & Roberts, L. (1959). *Speech and brain mechanisms*. New York: Atheneum Press.
- Pinker, S. (1994). *The language instinct*. London: Penguin Books.
- Raz, N., Lindenberger, U., Borrigue, K.M., Kennedy, K.M., Head, D., Williamson, A., et al. (2005). Regional brain changes in aging healthy adults: General trends, individual differences and modifiers. *Cerebral Cortex*, 15, 1676-1689.
- Raz, N., Lindenberger, U., Ghisletta, P., Rodrigue, K. M., Kennedy, K. M. and Acker, J. D. (2008). Neuroanatomical correlates of fluid intelligence in healthy adults and persons with vascular risk factors. *Cerebral Cortex* 18 (3). 718-726.
- Sakamoto, N. & Sakamoto, S. (2004). *Polite Fictions in Collision: Why Japanese and Americans seem rude to each other*. Tokyo: Kinseido.
- Salthouse, T.A. (1991). *Theoretical perspectives on cognitive aging*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Scovel, T. (1988). *A Time to speak: A psycholinguistic inquiry into the critical period for human speech*. New York: Newbury House Publishers, A division of Harper & Row, Publishers, Inc.
- Shing, Y. L., Werkle-Bergner, M., Li, S-C., & Lindenberger, U. (2008). Associative and strategic components of episodic memory: A life-span dissociation. *Journal of Experimental Psychology: General* 137(3). 495-513.

Walters, J. (1981). Variation in the requesting behavior of bilingual children.

International journal of sociology of language 27, 77-92.

参考資料 1

下のそれぞれの状況で、なんといいますか。空白を完成させましょう。

1. 友人を食事に招待するとき

あなた：『母が、君を食事に招待したいっていうんだけど、金曜日、うちで食事しない？』

友人：『ありがとう。よろこんで。お母さんにおあいするのがたのしみです。』

あなた：『 _____ 』

2. とっさの判断 (省略)

3. 誤解が生じたとき (省略)

参考資料 2

基本的な背景情報

名前(任意) & e-メール (任意)

出身地 (いつまで住んでいましたか)

大学と専攻

参考資料 3

同意書

私は、現在、『第一言語・第二言語(外国語)の社会語用論的言語能力の習得における臨界期』という課題で研究をしております。具体的には、実社会における言葉の使い方(語用論)と状況にあった適切な言語使用の習得、年齢が語用論的能力習得に与える影響に関する研究です。そこで、このアンケートを通して異なる状況においての様々な言葉の使い方を考え、年齢が語用論習得に与える影響を考えてみることになりました。皆さんからいただいた貴重なご意見・ご回答は、このプロジェクトのために匿名にて使わせていただきたいと思います。以上のような趣旨にご賛同いただけたら以下に署名をいただければ幸いです。ご協力ありがとうございます。

「私、 _____ は、貴プロジェクトのために私の回答・意見を
使うことを許可します」

日付 _____

署名 _____